キャリア・パスポートの効果的活用に向けて

～基本事項の確認と現状から～

平田　繁

Toward the Effective Use of Career Passports

～Confirmation of Basic Matters and Current Situation～

Shigeru Hirata

はじめに

文部科学省は2019年3月29日,「『キャリア・パスポート』例示資料等について（事務連絡）」を各都道府県教育委員会へ発出している。名称や目的，内容，指導上の留意点と共に様式例も明示している。これは，学習指導要領総則（2017年3月告示）第1章第4の1の(3)で「児童が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら,社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう,特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて,キャリア教育の充実を図ること。」を受け，小学校学習指導要領第6章特別活動第2〔学級活動〕3内容の取扱い(2)「2の(3)の指導に当たっては，学校，家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て，学んだことを振り返りながら,新たな学習や生活への意欲につなげたり,将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際，児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。」からである。しかし，事務連絡で様式例まで示されることは珍しく，指導要録くらいであろう。これは，実施準備ができている学校は2019年4月から，全ての学校で2020年4月からという期間の問題や，小・中・高で一斉に実施し，キャリア・パスポートを高校まで持ち上がる等，校種間連携，共通実践の必要性からであろう。

そこで本稿では,このように慌ただしく実践が開始されたキャリア・パスポートの基本的な事項を確認すると共に,実践状況と課題を取り上げ,効果的な活用に向けて展望するものである。

1. キャリア・パスポートの基本事項の確認

文部科学省の「『キャリア・パスポート』例示資料等について（事務連絡）」を基に定義や形式等，基本的なことについて確認する。

(1)　キャリア・パスポートの定義と意義

> 「キャリア・パスポート」とは，児童生徒が，小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について，特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として，各教科等と往還し，自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら，自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。
>
> なお，その記述や自己評価の指導にあたっては，教師が対話的に関わり，児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し，個性を伸ばす指導へとつなげながら，学校，家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない。
>
> （出典：文部科学省（2019）「キャリア・パスポート」例示資料等）

キャリア・パスポートの定義は，上記の通りで，キャリア教育に関わる活動の学びのプロセスを記述し,振り返ることができるポートフォリオ的な教材のことである。本教材の意義を小学校学習指導要領解説特別活動編では,三つ挙げている。一つ目は，小学校の教育活動全体で行うキャリア教育の要としての特別活動の意義の明確化。二つ目は,小学校からの系統的なキャリア教育の推進。三つ目は，児童にとっては自己理解を深める,教師にとっては児童理解を深めることになる。

(2)　キャリア・パスポートの名称と形式

キャリア・パスポートの名称は,各校に委ねられている。形式の例示としては,「学年の始まり」,「学期の振り返り」,「1年間の振り返り」,「学校行事がんばりカード」が示され，児童生徒用と指導者用となっている。

用紙は，A4 形式で現在の状況や目標を記入し，振り返るようになっている。また，先生やお家の人，友達からのコメント欄がある。これらは例示であり，都道府県教育委員会等，各地域・各学校で柔軟にカスタマイズされることを前提としている。しかし，「A4判（両面使用可）に統一し，各学年での蓄積は数ページ（5 枚以内)」,「カスタマ

イズする際には，保護者や地域などの多様な意見も参考にすること」の通達事項があり，遵守することになるであろう。いずれにせよ，目標を持って学校生活を送り，節目で振り返り，成長と課題を記録していきながらキャリア形成に繋がるような名称と形式であることが重要であろう。

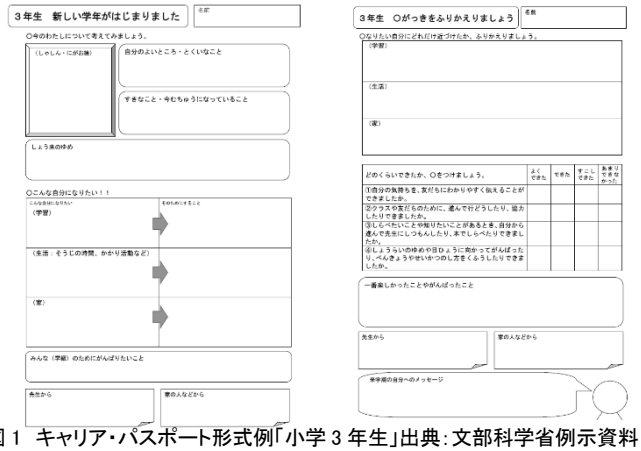

図 1　キャリア・パスポート形式例「小学 3 年生」出典：文部科学省例示資料

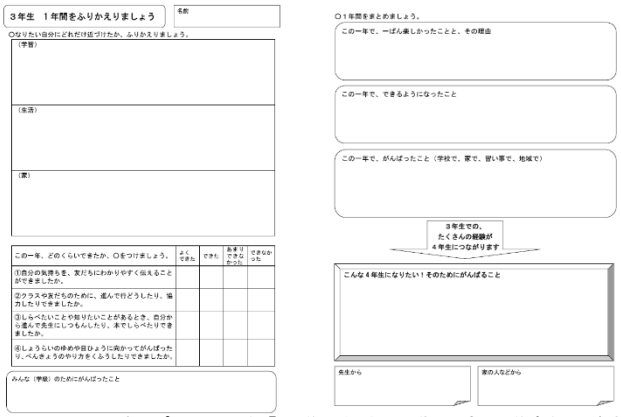

図 2　キャリア・パスポート形式例「小学 3 年生」出典：文部科学省例示資料

(3)　キャリア・パスポートの内容，指導上の留意点

①　内容

内容については，以下(1)～(9)の事項がある。

(1)児童生徒自らが記録し，学期，学年，入学から卒業までの学習を見通し，振り返るとともに，将来への展望を図ることができるものとする
※児童生徒が記録する日常のワークシートや日記，手帳や作文等は，「キャリア・パスポート」を作成する上での貴重な基礎資料となるが，それをそのまま蓄積することは不可能かつ効果的ではなく，基礎資料を基に学年もしくは入学から卒業等の中・長期的な振り返りと見通しができる内容とすること
(2)学校生活全体及び家庭，地域における学びを含む内容とする
※教科・科目のみ，学校行事等のみの自己評価票とならないように留意すること（①「教科学習」，②「教科外活動（学校行事，児童会活動・生徒会活動やクラブ活動，部活動など①以外の学校内での活動）」，③「学校外の活動（ボランティア等の地域活動，家庭内での取組，習い事などの活動）」の3つの視点で振り返り，見通しが持てるような内容とすること
※特別活動を要としつつ各教科・科目等と学びが往還していることを児童生徒が認識できるように工夫すること
(3)学年，校種を越えて持ち上がることができるものとする
※小学校入学から高等学校卒業までの記録を蓄積する前提の内容とすること
※各シートはA4判（両面使用可）に統一し，各学年での蓄積は数ページ（5枚以内）とすること
(4)大人（家族や教師，地域住民等）が対話的に関わることができるものとすること
※家族や教師，地域住民等の負担が過剰にならないように配慮しつつも，児童生徒が自己有用感の醸成や自己変容の自覚に結び付けられるような対話を重視すること
(5)詳しい説明がなくても児童生徒が記述できるものとすること
(6)学級活動・ホームルーム活動で「キャリア・パスポート」を取り扱う場合にはその内容及び実施時間数にふさわしいものとすること
※学習指導要領解説特別活動編を必ず確認すること
(7)カスタマイズする際には，保護者や地域などの多様な意見も参考にすること
(8)通常の学級に在籍する発達障害を含む障害のある児童生徒については，児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて指導すること。また，障害のある児童生徒の将来の進路については，幅の広い選択の可能性があることから，指導者が障害者雇用を含めた障害のある人の就労について理解するとともに，必要に応じて，労働部局や福祉部局と連携して取り組むこと
(9)特別支援学校においては，個別の教育支援計画や個別の指導計画等により「キャリア・パスポート」の目的に迫ることができると考えられる場合は，児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた取組や適切な内容とすること
（出典：文部科学省（2019）「キャリア・パスポート」例示資料等）

以上から，小学校から高等学校までの長期間，学校内外の様々な学びを自身で記録し，大人が対話的に関わりながらキャリア形成に生かすこととなる。これらのことから校内に留まらず校種間の共通理解・実践，保護者や地域との連携等，都道府県レベルでの取り組みが必要となるであろう。このように考えると各都道府県で校種の代表者からなる連絡会議や実践事例交流会等を定期に開催し，実践の見直しが必要となるのではないだろうか。また，「負担が過剰にならないように配慮し」に注意しなければ，妹尾（2020）が指摘するように多忙感で，実践の形骸化になるだろう。

②　指導上の留意点と管理

指導上の留意点として以下が記されている。

(1)キャリア教育は学校教育活動全体で取り組むことを前提に，「キャリア・パスポート」やその基礎資料となるものの記録や蓄積が，学級活動・ホームルーム活動に偏らないように留意すること
(2)学級活動・ホームルーム活動で「キャリア・パスポート」を取り扱う場合には，学級活動・ホームルーム活動の目標や内容に即したものとなるようにすること
※記録の活動のみに留まることなく，記録を用いて話し合い，意思決定を行うなどの学習過程を重視すること
(3)「キャリア・パスポート」は，学習活動であることを踏まえ，日常の活動記録やワークシートなどの教材と同様に指導上の配慮を行うこと
※児童生徒個々の状況を踏まえ，本人の意思とは反する記録を強いたり，無理な対話に結び付けたりしないように配慮すること
※うまく書けない児童生徒への対応や学級（ホームルーム）・学年（学科）間格差解消等も日常の指導に準じること
※特別支援学級に在籍する児童生徒，通級による指導を受ける児童生徒等，特に特別な配慮を要する児童生徒については，個々の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた記録や蓄積となるようにすること
※学習指導要領解説特別活動編にあるように「キャリア・パスポート」は自己評価，学習活動であり，そのまま学習評価とすることは適切でないこと
(4)「キャリア・パスポート」を用いて，大人（家族や教師，地域住民等）が対話的に関わること
※記録を活用してカウンセリングを行うなど，児童生徒理解や一人一人のキャリア形成に努めること
※学級活動・ホームルーム活動の時間の中で個別の面接・面談を実施することは適切でなく，「キャリア・パスポート」を活用した場合においても同様と考えること
(5)個人情報を含むことが想定されるため「キャリア・パスポート」の管理は，原則，学校で行うものとすること

(6)学年，校種を越えて引き継ぎ指導に活用すること
(7)学年間の引き継ぎは，原則，教師間で行うこと
(8)校種間の引き継ぎは，原則，児童生徒を通じて行うこと
※ただし，小学校，中学校間においては指導要録の写しなどと同封して送付できる場合は学校間で引き継ぐことも考えられる
※校種間の引き継ぎに当たっては，入学式前後の早い段階での提出を求め，児童理解，生徒理解に活用すること
(9)装丁や表紙等についても，設置者において用意すること。その際には，一定の統一性が保たれるよう工夫すること
（出典：文部科学省（2019）「キャリア・パスポート」例示資料等）

上記から，記録内容の偏りに注意し，学級活動の目標に則る，児童生徒の実態に配慮し，大人の対話的関わりの中で実践することになる。その上で学年間や校種間の引継ぎ，個人情報の管理に細心の注意を払うこととなる。これらのことは，基本的事項なので各々の学校において年度当初，確認・共通理解して実践に移す必要があろう。

2. キャリア・パスポートの実践状況と課題

(1)　福岡県「伊都っ子のノート」から

福岡県教育庁高校教育課は，2017 年から 2 年間，糸島市エリアでキャリア・パスポートの実証研究を行った結果を公表している。県立高 3 校，中学校 1 校，小学校 4 校である。組織として連絡協議会を設け，各校 PTA，教員，糸島市教育委員会，高校教育課で構成している。キャリア・パスポートの形式は，小学校低学年，中学年，高学年，中学校各学年，高校の 7 種類としている。記入は，年度当初と年度末で行われている。実証研究の成果は，保護者や教員向けアンケート結果をグラフや記述で報告している。記述の一部が以下である。

＜教師＞
・目標と振り返りを行うことで，子どもたちの変容を把握しやすい
・記入にあたっての説明が難しい
・記入に充てる時間の確保が難しい
・既存の教材との内容の重複がある
・小 1 には，年度初めの記入は難しい
・書くことが苦手な生徒の指導が大変である
・教師のコメントが負担になる
・記入や内容の点検を行う時間の確保が必要である
・コメントの記入例を示してもらいたい
＜保護者＞
・保護者が子どもの考えを知るきっかけとなった
・何を書いていいのかわからない
・伊都っ子ノート以外にも，様々なアンケート・書類を記入してもらうため，保護者の負担が大きい
＜保管（管理）＞
・紛失，汚損・破損が心配
・保護者に記入してもらうために，家庭に持ち帰らせてからの回収の負担感が大きい
・担任が保管する学校がほとんどである
・保護者欄の記入内容等のプライバシーにかかわる事項があるため，子どもたちが自由に閲覧できない場所に管理する必要がある
・不登校，特別支援を要する児童生徒への対応
・転入，転出する児童生徒への対応
・既存の教材との整理が必要である
・学校や地域の独自教材や他の教材との整合性
・教材のデジタル化
・地域限定で実施では，キャリア・パスポートの活用に限界がある
・全国一律の取組として，校種，学校を問わない活動にしなければ，12 年間継続の記録とはならない
出典:福岡県教育庁高校教育課(2019)「伊都っ子ノート」の取組について

キャリア・パスポートの有効性は認識しつつも，既存の教材との重複や整合性，教師の多忙化，保護者の負担感が見られる。また，配慮を要する児童生徒への指導，小学校 1 年生の記入の問題，管理に関しての課題がある。改善意見としては，デジタル化や全国一律化がある。

(2)　研究報告から

清水・胡田・角田(2020)は，キャリア教育で用いられるポートフォリオの現状と課題を報告している。対象は，2019 年 9 月までに教育委員会，教育研究所，教育センターで公表されたキャリア教育に関する研究で，その中で用いられたポートフォリオを評価している。評価の観点は，校種を超えた「学びの継続性」，学びを過去・現在・未来の視点で考える「学びの時間的展望」，学びをまとめ次の学びにつなぐ「学びの発展性」，「学びの発展性」を実現させるために必要な学習者のための「学びの評価」の視点である。

結果，ポートフォリオの研究の時期について，中央教育審議会が「キャリア・パスポート(2016)」の考えを示した時を前後して開発されているとしている。ポートフォリオについては，校種を超えた「学びの継続性」を目指したものが多く，「学びの発展性」は増えてはいるものの数の少なさを指摘している。特に教科等での学びを内省し，自己の学びにつなぐことができる中・高校生向けのポートフォリオ作成が必要としている。その他，学習者が学びの発展性を図る際の，自身の学びの過去と現在，未来の 3 つの時制を備えた「学びの時間的展望」の視点で振り返る用意が不十分としている。また，「学びの継続性」「学びの発展性」「学びの時間的展望」の構成要素のポートフォリオ作成が必要としている。さらに「学びの発展性」を図るには学習者だけでなく，学級の仲間，教師，保護者といった学習者の学習過程や成果を知る身近な他者からの評価を根拠に自己の学びをまとめ，次に取り組む学習につなぐ学習のための「学びの評価」の仕組みが不十分としている。

以上のことから，校種間を超えた 12 年間を見据えたポートフォリオの形式・実践，教科等の学びを往還すること，学習者以外からのコメントや評価を生かすこと等，多種多様の課題が山積していると考える。

(3)　キャリア教育に関する総合的第一次報告書から

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターは，「キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書(2020)」を公表している。その中の「小学校におけるキャリア教育の現状と課題」で，キャリア・パスポートに関する部分を中心に取り上げ，考察する。

まず，キャリア教育の計画についてである。全体計画の作成 79.9%（2012 年調査：63.4%），年間指導計画の作成 50.5%（2012 年調査：46.7%）である。学校目標への位置づけや基本的な方針は整いつつあるが，具体的な各学年の計画は不十分であろう。キャリア教育にかかわる体験活動が年間指導計画に含まれている学校では「職場見学（47.4%）」，「上級学校見学（61.8%）」，「ボランティア活動（37.6%）」となっている。キャリア教育にかかわる体

験活動に関して「日常生活や日々の学習と将来をつなげて考える」ことを重視している学校は67.1%で，日々学んでいることを将来の社会で役立てることを目指している学校は多いとしている。

キャリア・パスポートに関しては，作成していない小学校 74.8%，「1 冊のノートやファイルにまとめている」13.7%，「学年をまたいで継続的に蓄積している」9.5%で，これから準備という状況である。

次に研修にかかわることである。「キャリア教育に関する研修は実施していない（実施する予定がない）49.0%（2012 年調査：54.4%）である。キャリア・カウンセリングについては，「内容や方法が分からない」21.8%（2012 年調査：37.4%），「基礎的・汎用的能力を聞いたことがない」と回答した担任は 19.4%（2012 年調査：26.7%）である。この状況から研修の場の設定・実施こそ先行すべき事項である。家庭や保護者と「特に連携していない」小学校 15.5%（2012 年調査：29.7%）で，何らかの形で連携協力は図られている。

最後にキャリア・パスポートにかかわる校種間の結果である。キャリア・パスポートの作成状況は，図 3 の通りで，上級校種が進んでいるがそれでも半数程度である。

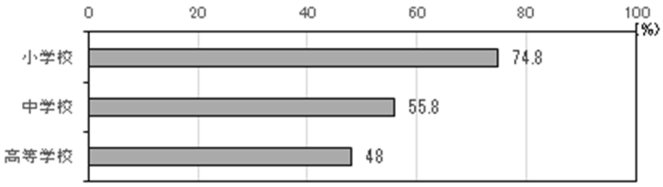

図 3 「『キャリア・パスポート』を作成していない」の選択割合
出典：「キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書（2020）」

取り組みを始めている学校の様式の結果については，図 4 の通りである。「一冊のノートやファイルとしてまとめている」や「学年をまたいで継続的に蓄積している」等が上位として選択されているが割合が低く，今後実践をしながら見直しが図られるであろう。

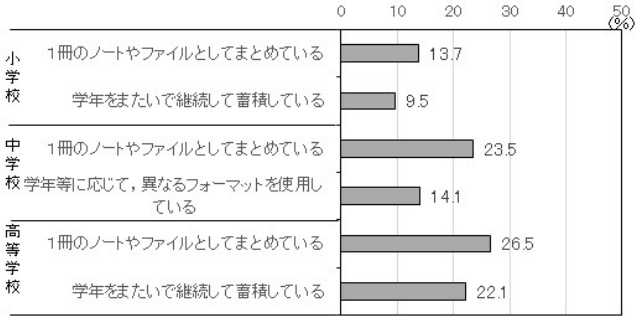

図 4「『キャリア・パスポート』をどのように作成していますか」の選択肢上位二つ
出典：「キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書（2020）」

記載内容については，図 5 の通りである。選択肢上位二つの結果ではあるが，「自己の成長（がんばったこと）」が中心で，中学校「職場体験活動」，高等学校「学校行事の記録・振り返り」等，校種間によるキャリア教育の内容や重点に相違があるようである。

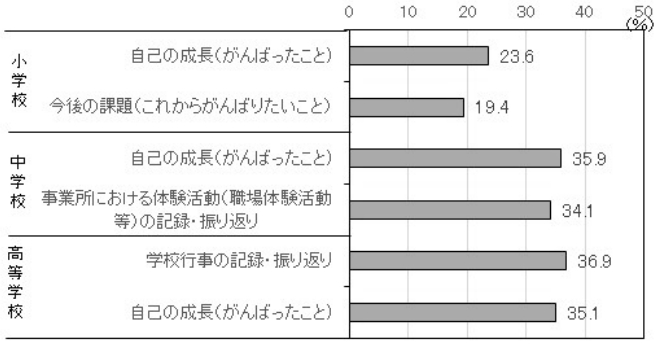

図 5 「キャリア・パスポート」の記載内容の選択肢上位二つ
出典：「キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書（2020）」

以上は，キャリア・パスポートを始める前の各学校の実態と捉え，まずは研修でキャリア教育の目標や内容，導入されたキャリア・パスポートの目的や意義等，共通理解をした上で，全体計画や年間指導計画への位置付けからスタートすることが必要であろう。

(4)　キャリア・パスポート実践事例

谷内口（2021）は，富山県氷見市立比美乃小学校の実践事例を紹介している。「特別なことをしたり新しいことを始めたりすることなく，『振り返り…今ある活動を生かして』，『対話的な関わり』」としている。日常的に行っている授業の振り返りや日記等を学級活動につなぐようにし，教師や家族，友達からの言葉をもらうようにしている。キャリア・パスポートとして残すものは，蓄積していたものを活動の節目や学級活動(3)においてまとめたり，繋ぎ合わせたりして残したいカードを自ら選択させている。学校としては，年間五枚程度（表裏）として，大まかに以下のようなものを残すとしている。

① 学期や学年のめあてや振り返り
（○年生のめあて　○年生を振り返って等）
② 学校行事関連
（運動会や学習発表会等）
③ 学習活動関連
（1/2 成人式，道徳等）
④ 係活動，当番活動や委員会活動関連
（働くこと，役割，責任に関すること）
⑤ 地域関連
（ふるさと教育等）

出典：初等教育資料，2021. 02，N0. 1004，26 頁

キャリア・パスポート導入に向け，学校全体で取り組むために行ったことは，「キャリア・パスポート主任」を校務分掌に位置付け，研修会の実施，年間指導計画の位置付け，振り返りの視点や対話的な関わり方だったという。また，保護者や地域への HP での発信，ファイルや表紙，保管ケース等の整備だったという。

(5)　キャリア教育リーフレット

文部科学省は，キャリア教育のリーフレット「キャリア・パスポート特別編 1～5」を作成している。

「特別編１」は，キャリア・パスポートの効果と新学習指導要領等の根拠の説明である。キャリア形成は，自然に獲得されるのではなく，外部からの組織的・体系的な働きかけが必要で，それを支える教材も不可欠としてキャリ

ア・パスポート導入としている。

「特別編2」は，北海道「小中高一貫ふるさとキャリア教育」と研究指定地域の一つ羅臼町の実践事例である。「地域ダイスキ！プロジェクト」を中心に地域の人，もの，ことへの参加や関わりの記録，将来の仕事や目標記述。これらを小中一貫教育研究会の体制で支え，児童生徒の記録への教師の関わり方，記録のさせ方の紹介である。

「特別編3」は，秋田県大館市「大館ふるさとキャリア教育」の実践事例である。「おおだて型学力」として，地域教育資源を生かしたボランティア活動，地域・企業が行う仕事やイベントのお手伝い，日常の授業の振り返りの重視である。特に日常の各教科等で培う「振り返る力」がキャリア・パスポートに生かされることの説明である。

「特別編4」は，世田谷区立尾山台小学校の実践である。日常的な振り返りはあったが，学年で途切れていた。そこで身に付けさせたい力を，基礎的・汎用的能力をもとに明確化し，キャリア教育年間指導計画で系統的，具体的にしたという紹介である。

「特別編5」は，大分県中学校教育研究会進路指導部・キャリア教育部会の実践，県内全小中学生対象「自分を知ろうカード」の紹介である。県内全小学校6年生を対象に3学期「自分を知ろうカード」を記録させ，中学校入学後，12 月頃の学級活動で振り返りをさせる校種を越えた活用実践事例である。

以上，5つの事例から目的の理解，体制づくり，地域資源の有効活用，年間指導計画への明確な位置付け，校種間連携の具体化が推進の課題と考えられるであろう。

(6)　福岡県下の状況

福岡県下の小学校，数校に5月末，メールや電話で問い合わせてみた。結果が以下である。

表1　福岡県下，小学校の状況（5月末の状況）

- 北九州市A校…今までと同様のめあてカードを使用。年間3枚綴じる。
- 柳川市B校…文科省例示資料に基づき市内で作成。学校で一部修正して使用。年間6枚程度保管。
- 大木町C校…昨年度から実施。形式は，文科省例示に沿いながら一部変更。高学年は主に行事毎に記録。
- 春日市D校…形式は，文科省例示資料に基づく。自己評価のようになっている。
- 福岡市E校…低中高学年で基本形式を決め，学年で多少変更。Chromebook で写真として保存予定。保護者にも記入依頼をし，実施済み。
- 八女市F校…文科省例示資料に基づき学校で作成。年度当初に書き，行事で記入予定。
- 柳川市G校…文科省例示資料で使用。
- 久留米市H校…文科省例示資料に基づき学校で作成。年度当初に書き，行事で記入予定。
- 朝倉市I校…文科省例示資料に基づき学校で作成。既存のめあて記入・掲示との併用に苦慮。

県下の状況は，文部科学省通達通り，2020 年度から開始し，本年度が2年目である。特別なことをすることなく既存の掲示用「めあてカード」や「学期振り返り」を充てることや併用を選択しているようである。

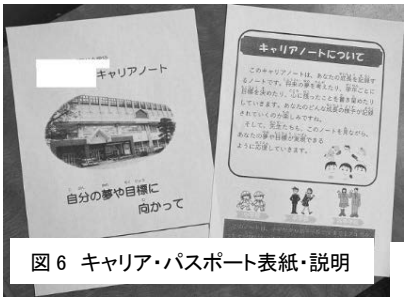

図6　キャリア・パスポート表紙・説明

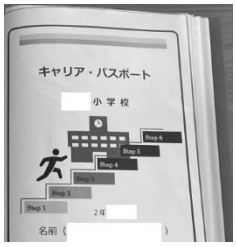

図7　キャリア・パスポートの表紙

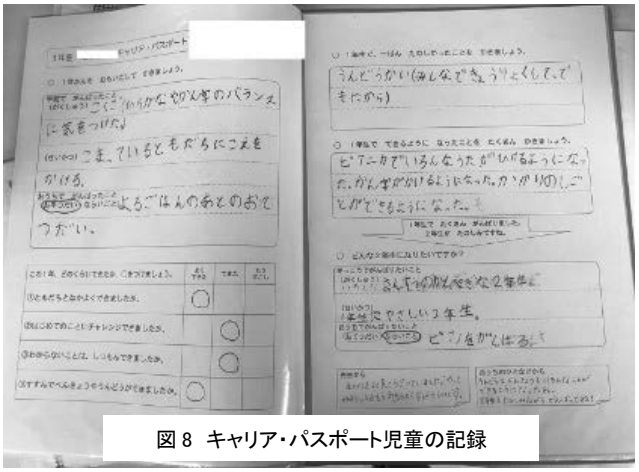

図8　キャリア・パスポート児童の記録

形式は，図6，7，8にあるように，例示を基に各学校・学年での修正が行われており，基本形式を守りながら，学校・学年独自ができているようである。そう考えると課題となるのは，書かせる時の指導，活用方法，管理，引継ぎ方法となるであろう。

3.　キャリア・パスポートの効果的活用

文部科学省の通達やリーフレット，先行実践，調査研究等を概観してきた。キャリア・パスポートの効果的活用を考えた時に何が必要となるであろう。

まずは，目的や目標の共通理解であろう。今回，文部科学省から例示資料で，やらされ感がある。しかし，現状の世界や日本の状況を考えると今まさに教育が動かないと手遅れになるであろう。コロナ禍が社会経済に大きな打撃を与え，職業や人口に変化をもたらしている。一気にデジタル化が進展し，科学技術の進展を早めた。このことから更に先が読めない20年，30年後に生きる児童生徒にキャリア教育で言われる「基礎的・汎用的能力」の育成こそ重要であるという認識を持たなければいけないだろう。そのために県下レベル，教育事務所レベル，市教委レベルでの定期の情報交換・実践交流会が必要であろう。

次に，学校レベルの計画である。具体化するには，学校長のリーダーシップの下，キャリア教育全体計画の創造が必要である。その上でキャリア・パスポートのねらいと位置付けの明確化，学年間を引き継ぎ単年度で終わらせないための年間指導計画への具体化をすべきであろう。特に年間指導計画では，学級活動，児童会活動，学校行事の内容等を位置付けると共に，学級活動の学年間の内容の系統・発展を明確にしておく必要がある。また，谷内口（2021）の実践事例にあるようにキャリア教育主任の必置が期待

される。

そして学級レベルである。基本は，学年・学級経営方針である。学級担任が，よりよい学校生活をつくろうとする思いや願いを児童と共有し，一緒につくり上げていく姿勢がなければならない。その上に立って，日常の学習指導の充実と振り返り，学級活動，係活動，当番活動の蓄積がキャリア形成に繋がるものと考える。ところで，多くの学級では，学期や月の「学習や生活のめあて」を背面に掲示している場合が多い。振り返りもさせ，教師のコメントを入れて掲示している場合もある。また，通知表との絡みから学級担任独自で「学習や生活に関わる，学期の振り返り」を記入させている場合もある。学校行事や児童会活動，クラブ活動も同様である。つまり，学期毎にめあてを決め，振り返りをさせ，家庭に連絡という形を既に取っている。但し，通知表で家庭へ連絡する必要性や児童指導要録作成からである。よって，学年や進学先に引き継ぐことや自身が常日頃から振り返り自己成長につなぐという意味からは，目的にズレがあるが，同様の取り組みをしていることとなる。福岡県下の一部の学校では，このことから不要論が出ている所もあるという。デジタル化等で工夫し，一体化や一本化が期待されるであろう。

最後に管理や利用方法である。個人情報の保護，12 年間持ち上がることを考えると細心の注意を払い，厳重に管理・保管となる。しかし，目にしなくなると目標の意識化は薄れ，本末転倒となる。そこでGIGAスクール構想で一人一台の端末となったので，デジタル化の進行と共にキャリア・パスポートの作成，保存方法もデジタルへの移行があっての良いのではないかと考える。福岡市の一部の学校でそのような方針を立てており，写真や動画などと共にキャリア・パスポートを残していくと更に効果的になるのではないかと考える。

おわりに

2020 年度末に文部科学省から二つの通知が発出されている。一つは，「『キャリア・パスポート』に関する Q&A について（令和３年２月改訂）」である。これには，問いが 9 つ上がっている。趣旨，学習指導要領の規定との関係，既に利用している記録の活用，特別支援学級での作成配慮，校種間引継ぎ，紛失対応，入試や就職試験への使用，転出入の場合の様式についてである。もう一つは，「『キャリア・パスポート』の学年・校種間の引継ぎについて（令和３年２月 19 日）」である。

これらの通知から，課題は山積していることが窺える。しかし，まだ始まったばかりである。校内での共通理解・実践，児童生徒の活用の様子や成長を見守りながら，キャリア・パスポートの効果的な活用を見出していく必要がある。その上で校種間連携連絡会（仮称）を発足させ，成果を出し合いながら都道府県レベルで具体化が期待されるであろう。そうすることで6・3・3，或いは6・6，9・6と経る中で校種間の垣根が無く，スムーズな児童生徒の成長が期待できる。また，進学後は「指導要録の抄本または写し」を進学先に送付することとなるが，学級編成や入学直後，問題行動等，活用は僅かであろう。そう考えると指導要録や抄本と併せて，或いはそれ以上にキャリア・パスポートの方が，児童生徒自身が自己理解に，また教師が児童生徒理解に活用できるかもしれない。プライバシーや個人情報保護には，細心の注意が必要であるが，管理よりも活用しやすい保管方法を選択すれば，より広く成果が出るのではないかと期待する。

文献

文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説総則編（平成 29 年告示）解説．東洋館出版.

文部科学省(2018)小学校学習指導要領解説特別活動編(平成 29 年告示）解説．東洋館出版.

文部科学省（2018)「キャリア教育リーフレットシリーズ特別編 1・2・3・4・5」https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div09-shido.html.

文部科学省（2019)「キャリア・パスポート」例示資料等について（事務連絡） https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/08/21/1419890_001.pdf

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2020）キャリア教育に関する総合的 第一次報告書（令和２年３月）https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_SogotekiKenkyu/

妹尾昌俊(2020)「教師崩壊 先生の数が足りない，質も危ない」293-296.PHP 新書

谷内口まゆみ（2021)「キャリア・パスポートの活用」.『初等教育資料』2021.02 NO1004．東洋館出版.

清水克博・胡田裕教・角田寛明（2020）初等中等教育におけるポートフォリオを活用したキャリア教育の現状と課題－学びの継続性，時間的展望，発展性と学びの評価の観点からの考察を通して－，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 5，49-58.

福岡県教育庁教育振興部高校教育課．キャリア・パスポート「伊都っ子ノート」の取組について https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/143/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2018/11/20/1411158_005.pdf.

文部科学省（2021)「キャリア・パスポート」Q&A について（令和３年２月改訂）https://www.mext.go.jp/content/20210219-mxt_jidou01-000007080_2.pdf.

文部科学省（2021)「キャリア・パスポート」の学年・校種間の引き継ぎについて（令和３年２月 19 日）https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917_00003.htm.